『増鏡』の世界

山下宏明

一

四条天皇崩御の急報に接した執権北条泰時は、無言のまま一室にとじこもり、その対策を熟考する。その泰時をして〈こはいかがせんずる、泰時運すでに極たり〉（五代帝王物語）[1] と思わせた当時の京都王朝の複雑な状況が、この泰時に重圧感を与えていたことが想像される。つまり泰時が考えたことは、〈此事を計ひ申さずして、京都の御沙汰ならば、散々の事出できぬべし〉という慮りであった。当時の王朝内にどのような対立があったかは、今問うところではない。ともあれ、『五代帝王物語』の著者[2]によれば、泰時の苦悩は、いかにして鎌倉が主導権を握りつつこの難局を切りぬけるかであった、と言う。しかも泰時の内心では、すでに方針がきまっていたとも言う。〈何ともあれ土御門の御末をこそとは心中におもひけれども〉、みずからの〈小量〉に思いをいたせば、決断しかねる。そこで若宮社にこもり、くじにより神意をただすことになる。はたせるかな期待通り〈土御門院の宮（後の後嵯峨天皇）ととりたれば〉、いよいよ思い通りに事をはこぶことになる。やがて城介義景が京への使者にたてられるが、その義景は途中からとって返す。そして言うのには、〈もしすでに京都の御計ひにて、順徳院の宮（忠成王）つかせ給たらばいかがあるべき〉であった。泰時の意は、神意を背景に決している。〈何条子細あるまじ。よしさる事あらばおろしまいらすべし〉と申しふくめた、と言う。

この一節から読みとれるのは、土御門系の後嵯峨天皇の践作に関して執権泰時の介入があったこと、このことは自明のことであるが、特に『五代帝王物語』の著者にあっては、この泰時の決断を強く描き、それに〈計ひ申さんとせば、小量の身あるべき事にもあらず〉と、その人がらを評価しつつ、それゆえに若宮社の神意を採用する。しかも念入りにも、さかのぼって後鳥羽天皇譲位の時にも同じく神意をただすことのあったことをひき合いに出すまでの周到さを見せている。言いかえれば、土御門系の後嵯峨天皇の践祚の事情を、泰時を中心とする関東側からとらえて、それにその後嵯峨天皇の践祚を正当化していると言えるだろう。この事実は、筆者の見るところ、『五代帝王物語』の著者の主題とも言うべき関心を示すものではないかとさえ考えられる。すなわち、「五代帝王」とは言いながら、著者の「五代」の描きようは、これを機械的に量的に見ても、後堀河・四条を扱う二十八パーセントに対し[3]、後嵯峨・後深草・亀山の三代に七十二パーセントを費し、この三代にわたって後嵯峨の仏事などに詳しく、またその崩御を詳述して物語をしめくくってもいる。このような事実から、次のよ

うに想像される。すなわち『五代帝王物語』の著者は、散佚した『弥世継』を受けて五代帝王の物語を著しながら、後嵯峨の在位時代およびその院政期の治世を集約的に描いている、と。この著者の意図が、四条天皇の崩御後の皇位継承についても、土御門系の継承を神意にかなったものとして正当化する。されば、さかのぼって源平の動乱期に平氏の西国下向の時点で、後鳥羽天皇の即位を〈御占にも……御末めでたかるべしと占ひ申し〉ながら、承久の乱によって、一時、後堀河からその皇子四条へと続くことになるが、所詮はそれも〈御宿縁あるによりて、纔に廿余年の程たもたせ給といへども、つゐには神宮の御計むなしからぬ事、不思議に覚侍り〉と、土御門系にひきつけてとらえることになるわけである。

二

問題の、泰時の指示による後嵯峨天皇即位の事情が『増鏡』三神山にも見られ、しかも先学によれば、[4] 問題の個所は、『増鏡』が『五代帝王物語』に依拠したことがほゞ確実である。しかも『増鏡』の著者の場合、『五代帝王物語』に見たような関東的な視点や、後嵯峨天皇の践祚を正当化する姿勢は見られない。『増鏡』に描かれるのは、東使城介義景の上洛をめぐって、その使者が順徳系の修明門院（順徳天皇の母）の邸におもむくか、土御門系の承明門院（土御門天皇の母）の邸におもむくか、これを胸はずませながら見まもるサスペンスが一つにはある。それに予測としては〈もしやと〉程度しか期待のもてなかった承明門院の御所土御門殿の、

門はむぐら強くかため、扉もさびつき柱くちて、開かざりけるを、郎等どもにとかくせさせて、内に参りて見まはせば、草深く苔むして、人の通へる跡もなし（三神山）[5]

という荒涼たる光景を、見るように物語の様式（表現方法）をもって描くところに『増鏡』著者の意図はあるだろう。ともあれ『増鏡』は、明らかに『五代帝王物語』を受けている。特に、ここで強調したいことは、『増鏡』の著者が『五代帝王物語』の存在を知っていたということである。いささか先走った形で疑問を呈するならば、『五代帝王物語』を知っていながら、なぜ『増鏡』の著者は、重ねて後鳥羽院の御代から語りおこす『増鏡』を書いたのかということである。

『五代帝王物語』は、次のような形で始まる。

神代より代々の君の目出き御事どもは、国史世継家々の記に委く見えて、後鳥羽院の御代まではかくれなくみえ侍めり。

言うまでもなく、〈国史〉とは官撰の六国史を言い、〈世継〉とは、私撰国史の祖『栄花物語』や『大鏡』『今鏡』『水鏡』の類を言う。それに〈後鳥羽院の御代まではかくれなくみえ侍めり〉とあるから、散佚した『弥世継』をも受けていることが明らかである。それに〈代々の君の目出き御事どもは〉といった、聖代への祝言自体が明らかに「世継」のジャンルの継承を物語っている。にもかかわらずである、掲出の本文が物語の冒頭文であることを見れば、それは、もはや単なるいわゆる鏡物としての「世継」そのままでないことも明らかである。そ

れに、この『五代帝王物語』の場合、見て来たような土御門系、順徳系、更には後堀河系という王朝内三系統の確執の中に土御門系の皇位継承を正当化し、これを物語の主題に設定してゆく、政治的なかかわりをいかんともしがたくもっている事実を見すごせないだろう。そこには、泰時をして〈京都の御沙汰ならば、散々の事出きぬべし〉と言わしめるような時代状況が、避けようにも避けられない形で物語を規定している。

ところで、これまで「世継」意識は、どのような歩みを示していたか。いわゆる鏡物の中でももっとも評価の低い『水鏡』[6]が、その冒頭と末尾に次のように言っているのに注目したい。

（巻頭）おほかたはいまのよをはかなくみうとみ給て、いにしへはかくしもあらざりけんとあさくおぼすまじ。すべて三界はいとふべき事也とぞおぼすべき。この目のまへのよのありさまは、おりにしたがひて、ともかくもなりまかるなり。いにしへをほめ、いまをそしるべきにあらず。……

（巻末）いづらはめでたかりし世中、いずらはわろかりし事、

見るように、仏教の輪廻的回帰思想をよりどころとして、いにしえをよしとする「世継」の様式、言いかえればこの時代に考えられていた「歴史」概念を否定するのが『水鏡』である。つまり「世継」形式による歴史展望の様式は、すでに『水鏡』において破産の宣告を受けていたはずである。『水鏡』の主張を、この時代の思潮と言い得るかどうかはわからないけれども、とにかく『五代帝王物語』の著者は、「世継」を成り立たせるために必須の、鏡物としての類型、すなわち昔語りの形式による序を、歴史展望のための基点としてすえることをしなかった。それにもかかわらず、明らかに『五代帝王物語』を見ているはずの『増鏡』の著者が、改めて昔語りの場を設定し、〈古代にみやびかなる〉老尼の昔語りを〈其世にあへる心ち〉しつつ、その〈いと古代なる〉世界にこよなき愛着を感ずるのであった。それに著者は、『五代帝王物語』の存在を知りながら、それをとび越えて改めて〈隆信の朝臣の、後鳥羽院の位の御ほどまでをしるしたる〉〈いや世継〉（『増鏡』序）を継承することを意図した。言いかえれば、鏡物を自己否定した『水鏡』、および『五代帝王物語』を介在させながら、重ねて「世継」の再生を志した『増鏡』著者の姿勢を改めて検討してみる必要がある。かくして、日本文学史上のいわゆる鏡物の位置、特に『増鏡』の占める位置は一層明確に認識されることになるだろう。本稿は、その一つの試みにとどまる。

三

ところで、『増鏡』は、はたして鏡物そのものの再生と言えるだろうか。少くとも『今鏡』に見るような平板な列伝形式の「世継」のそのままの再生はありえなかった。その原因については、なお多角的に考える必要があるが、何よりもその状況として『五代帝王物語』にも受けとめていたような歴史の現実相のあったことを否定しがたいであろう。その事は、物語本文（序を除く）のはじめからすでに明らかで

ある。すなわち、

御門始まり給てより八十二代にあたりて、後鳥羽院と申おはしましき。御いみな尊成、これは高倉院第四の御子、御母七条院と申き（おどろのした）

として、その巻一を後鳥羽天皇の帝紀で始める。この冒頭は、一応、鏡物の様式を踏襲しているが、これを巻二の冒頭に見るならば、その様式は早くもあえなくくずれ去って、武士のおこりから鎌倉幕府の開幕、続く三代将軍、更に承久の乱へと、関東の状勢を描き続ける。つまり現実の相をおうこと自体が、いわゆる鏡物の形式をはみ出して行く。まず、何よりもこの巻一、二を通じて承久の乱へと集約して行くあり方は、単に編年体による客観的な、また紀伝体による平板な歴史物語の手法とは異質であることを感じさせるであろう。こうした手法は、例えば「老のなみ」に、蒙古襲来から、日吉の衆徒の強訴、御輿振りへと、世の騒擾を積み重ねて描いていることにも見るように、単に素材論的な意味を越えて、叙事展開のあり方、言いかえれば作品の様式そのものにかかわると言うべきであろう。

文永九年二月十一日、病ようやくあつくなった後嵯峨院を、新院の後深草院と亀山天皇が見舞う。後嵯峨院から両人にそれぞれ遺言がなされる。十七日の朝から容態が変り、聖の見守る中に崩御。やがてその葬儀、大宮院姞子の落剃、続いて源具氏の出家、洞院公宗の死、その父公雄の悲嘆に重ねてその妹京極院佶子（亀山天皇の皇后）の崩御、はてはその父実雄の死を〈物思ふには、げに命もつくるわざなりけり〉（あすか川）と人々の悲嘆を重ね描く。〈あはれに悲しといひつつも、とまらぬ月日なれば〉、やがて中陰明けとともに、後嵯峨院亡き後の執政をめぐって、〈世の中は、新院（後深草）かくをはしませば、法皇の御かはりにひきうつして、さぞあらんと世の人も思ひきこえける〉その人々の予期に反して〈当代（亀山）の御ひとつ筋にてあるべきさまの（後嵯峨院の）御をきて（遺言）なりけり〉として、いわゆる両統の対立が表面化し始める。この亀山天皇の親政を〈思ひの外にもと、思人〻〳〵も多かるべし〉とし、更にはその後の継承問題をめぐっても〈いつしか、院がた、内がたと、人の心〻〳〵もひき別るるやうに、うちつけ事ども出で来けり〉と事態を眺め、これらの事態の展開をおいつつ〈人のひとり（後嵯峨）をはしまさぬあとは、いみじき物にぞありける〉という慨嘆が一貫して貫かれているわけである。つまり、後嵯峨院の崩御を契機として両統の対立の見え始めたことを言っているのである。筆は更に続く。主上亀山の春宮（後の後宇多天皇）の不例、当然これを主上の心痛と不安においてとらえることになり、〈よろづかど〻〳〵しき（才気ばしった）〉主上の決断に〈春宮にては、いまださる例〉のない灸治を人目を避けて決行する様を克明に描く。父君の実行力と献身により春宮の病はいえるが、『増鏡』は、重ねてこの年（文永十年）に地震のうち続くこと、その修法の中に〈二の対より〉出火のあったこと、この大事にも亀山天皇の〈荒らかに踏ませ給たりければ、さばかり強き戸まろびて開〉く、その行動力により危く重要文書の焼失を免れたことを言う。これら相次ぐ不祥事の連続の

中に〈かくて今年も暮れぬ〉と年改まりを記す。この日次の記録にも、単なる日録的な記録文を越えて、状況の変化の積み重ねに感懐を重ねて時の経過をとらえている。いわば感懐にいろどられた動的な年がわりの記録文を形成していると言える。それは、鏡物（特に『今鏡』）のとりあげた個々の時代に充足するあまり静的にそれぞれの時代を謳歌する平板な叙事とは対照的で、歴史の展開に感懐をもって注がれる目のつけようが、鏡物の様式を越えさせていると言えるだろう。

「むら時雨」の巻で、後醍醐天皇の中宮禧子腹の懽子の斉宮立ちを急ぐ中に、源中納言具行を中心に、〈おほかた御本上（性）はやりかにおはす〉大塔宮二品法親王尊雲らの動きが始まり、それらの動きが、

つつむとすれど、こと広くなりにければ、武家にもはや洩れ聞きて、さにこそあるなれと用意す。まづ九重をきびしく固め申すべしなどさだめけり。かくいふは、元弘元年八月廿四日也。

として、局面が動き始める。この〈かくいふは、元弘元年八月廿四日也〉の一文が、やはり単に年月日を記録する記録文としての様式を越えて、この元弘元年八月廿四日をもって、元弘の乱という大事の展開し始めたことを銘記するものである。言いかえれば、この日次の確認の中に、事態・状勢の進展をくくりこむとともにその後への展望を志す姿勢が見られるだろう。一見類似の表現が、官撰の国史に対しあえて私撰の和文国史の道をきりひらいた『栄花物語』の、例えば中宮安子の皇女出産とその直後の崩御を〈かくいふは応和四年四月廿九日、いへばおろかなりや〉にも見られる。しかしこの『栄花』の場合は、中宮安子一人に対する感懐がこの記録文にこめられていると見るべきで、形態的には『増鏡』に通うものを見せながら、その表現の示す機能は、かなり異質なものがあるようだ。この、時間の推移に状況の変化を確認してゆくあり方は、旧来の鏡物の〈古をかがみる〉姿勢そのままではない。思えば、この静的ならぬ動的とも言うべき叙事展開のあり方が、ともかく元弘の乱の経過を描かせたし、六波羅からさしむけられた常陸守時知の宮中内の捜索に

女房の曹司〳〵より、樋洗しめく女の童など、我先にと走り出で、調度ども運びさはぎ、くづれ出づる気色ども、いとあさましく、目もあやなり

という動きのある描写を見せ、〈錦の木丁のうちにいつかれまし〳〵つる后の宮も、なにの儀式もなく、忍びてあはて出でさせ給〉う現実をとらえた。このような〈大かた京も鎌倉も、騒ぎののしる〉〈けしからぬ〉状況に、〈承久の昔もかくやと、今さらに思ひやらる〉のであった。この著者にとって、眼前に展開する元弘の乱によせる痛切な関心が、承久の乱をまざ〳〵と追体験させたのであり、これを言いかえれば、元弘の乱という現実の体験を契機として、承久の乱に一つの画期を見ているとすら言えるだろう。この点をあえて強調するならば、『増鏡』の著者が、物語を、後鳥羽院による承久の乱をもって始めたのも、実にこの〈承久の昔もかくやと、今さらに思ひやら〉せた元弘の乱の現実体験があったと言っても過言ではあるまい。勿論、こ

れからただちに『増鏡』が元弘の乱を主題として描いているとはとうてい言えない。戦闘そのものは、

秋も深くなり行ままに、山の木の葉のうちしぐれ、谷の嵐のをとづるるもあたのきほふかと、きもを消す御住居、いつしか御身をかへたる心ちし給ふもあぢきなし（むら時雨）

という、これを〈いとものしき〉とうけとめざるをえない王朝人の感覚をもって、和歌的抒情の世界にひき込んで行く、現実に〈憂かりける身を秋風にさそはれて思はぬ山の紅葉をぞ見る〉に収斂するのが『増鏡』である。けれども、とにかく、この乱に一役を果した源具行について、関東への連行、その妻子との別離、佐々木道誉の同行から、ついに

今はの際も、さこそ心の中はありけめど、いたく人わらうもなく、あるべきことと思へるさまになん見えける（久米のさら山）

その達観した死の受けとめようをも描きえたのであった。この具行については、『太平記』（巻四・笠置囚人死罪流刑事）と重なる面があり、両作品の関係は、『太平記』が『増鏡』に見るような世界を典拠としたものであろうが、『太平記』の中でも、天正本系の諸本は、長坂成行氏の指摘[7]によれば、重ねて『増鏡』の影響を受けていると言う。これを言いかえれば、『増鏡』の著者が、軍記物語と呼ばれる作品の編者の関心をそそるような世界にまでその視点を拡げて行った事実が確認できるだろう。それほどこの『増鏡』は、軍記物語の世界にも近いものを見せている。現に、上に指摘した、日次的記録の文が、単なる記録を越えて状況の変化を総括して行くありようは、『平家物語』が、例えば相次いで反平氏勢が挙兵するという現状を認識できない平氏が、あいも変らず除目による官位昇進にうつつをぬかしている、そうした騒然とした状況の中に、〈さる程に、寿永二年になりにけり〉（六・横田河原合戦）としめくくるあり方と通うものがあるだろう。[8]

四

歴史物語の中でも『大鏡』や『今鏡』のような紀伝体による作品は、時の経過よりも、個々の人間の逸話を逐うところから、構成的には羅列的で、ともすれば平板に流れるのを免れがたい。特に『今鏡』のように、その扱う時代（例えば後三条や後白河）を謳歌し、しかも回顧的な傾向の濃い鏡物にあっては、その平板さがひときわ顕著である。この点、『増鏡』は、鏡物といいながら紀伝体ならぬ編年体を骨組みとしたこと、それも単に事件の経過を客観的に年次を逐って展開するといったものではなく、上述のように、元弘の乱による後醍醐天皇の親政再興への構想を意図し、この構想に即して〈承久の昔もかくやと今さらに思ひやらる〉ところからさかのぼって承久の乱から始めている。つまり元弘の乱による親政再興への構想を著者の現時点的課題とする、そうした構想に即して後鳥羽院の承久の乱から描き始める。だからこそ『五代帝王物語』との年代的な一部重複をも辞さなかったとも言えるだろう。この構想のゆえに、鏡物には珍しく構想力が付与されている。

勿論、著者の資質として、

なべて世に年ごろ埋もれたりし人々〳〵、いつしかと官位さま〴〵に、思まゝなる気色ども、目の前に移かはる世のありさま、今さらならねど、いとしるく掲焉なるもあぢきなし（むら時雨）

と見る目のあることを否定しがたい。すでに指摘され尽しているように、王朝をより所とした著者の視角はゆるがず、例えば蒙古の襲来を一応はとらえながら、

かやうに聞こゆるほどに、蒙古の軍といふ事起こりて、御賀（試楽と舞御覧）止まりぬ。人〴〵口惜しく本意なしと思すこと限りなし。何事もうちさましたるやうにて、御修法やなにやと、公家・武家、ただこの騒ぎなり。されども、ほどなくしづまりていとめでたし。（あすか川）

と、その主な関心は、蒙古の襲来による社会の騒動そのことよりも、そのために中止となった王朝儀礼を惜しむにあることは言うまでもない。さればこそ、例えば西園寺一家の栄花を、

宝治の頃、神無月廿日あまりなりしにや、紅葉御覧じに、宇治に御幸し給。上達部、殿上人、思ひ〳〵色〳〵の狩衣、菊、紅葉の濃き薄き、縫物、織物、綾錦、すべて世になき清らを尽しさはぐ。いみじき見物なり。殿上人の舟に楽器まうけたり。たち花の小島に御船さしとめて、物の音ども吹きたてたるほど、水の底も耳たてぬべく、そゞろ寒き程なるに、折知り顔に空さへうちしぐれて、真木の山風あらましきに、木の葉どもの色〳〵散りまがふ気色、いひ知らずおもしろし。女房の船に色〳〵の袖くち、わざとなくこぼれ出でたる、夕日にかかやきあひて、錦を洗ふ九の江かと見えたり。平等院に中一日わたらせ給て、さま〴〵のおもしろき事ども数知らず。網代に氷魚の夜もさながらののしり明かして、帰らせ給。（内野の雪）

という、あたかも『栄花物語』の、完結した美の世界をくりひろげている。このような王朝物語さながらの世界を再現しようとの志向が、『五代帝王物語』の存在を承知しながら、あえて年代的にも重なることを省みず『増鏡』を書かせたのであり、それゆえにこそ承久の乱における後鳥羽院の遺志を実現に運んだ後醍醐天皇の親政再興までの歩みを描かしめたと言える。ともあれ、この王朝時代さながらの物語の世界再現への志向が基盤となって、歴代の勅撰集撰集の次第を描かせたし、その和歌の世界への関心が、土御門天皇の即位を描いてただちに摂政良経の人となりからその和歌についても描かせる。それゆえに、上述したような作者の主題からすれば承久の乱そのことにあるはずが、その主題からそれて後鳥羽院の和歌への関心のあり方を、慈円、定家の長歌もおりまぜて長々と書かせる。実は、これら和歌の世界こそ著者その人の興味・関心の中核をなすと言っても過言ではない。これも指摘されているように、後宮の生活が、その拠った、例えば『とはずがたり』さながらに描かれているのも、これらを通して、著者の主張が、王朝貴族の生活が、鎌倉時代の宮廷にも一貫して存在し続けて来たことを確めようとするところにあると言える。[9] こうした

志向が、全体の構成を、後鳥羽院による承久の乱から、その遺志を実現した後醍醐天皇の隠岐からの還御までを描かせた、とさえ言えるだろう。

五

『増鏡』全編の構成について、巻頭の序を元弘の乱の結末、四条隆資の還俗を以て結ぶ結末との不照応が指摘される。[10] 巻十七という巻数の不完結性が指摘され、この後、建武中興の完成を描く三巻を加え二十巻が予定されていたろうと言われる。十七巻という巻数を中途半端なものと見るかどうかはわからない。それに、作者を、後醍醐天皇への敬慕の念のあつかった二条良基に擬し、未完成に了った原因について、良基がその執筆段階で建武中興瓦壊を体験したからではないかとも言われる。自然な推理である。しかしながらこの点についても、当時の公家たちの生き方が、持明院系、大覚寺系いずれに結びつくかの問題をどの程度に重視していたかを思えば、なおこれを決定的な理由とはしがたいのではなかろうか。それはとにかくとして、承久から建武までを描いたことに、王朝の健在を願望する著者の意図の見られることだけは明らかである。

六

その方法を更に検討しておくならば、例えば本稿の冒頭にとりあげた後嵯峨天皇践祚の事情を描く東使上洛の場面を見ても明らかなように、文体そのものが王朝物語の世界を志向している。この物語を支える王朝への執着が、両統の対立から退位へと追い込まれる後深草天皇を描いても、春宮（後の亀山天皇）の即位近しとの噂に、

御門（後深草）は飽かず心細う思されて、夜居の間の静かなる御物語のつゐでに、内侍所の御拝の数をかぞへられければ、五千七十四日なりける（おりゐる雲）

と描く。後深草が自らの在位日数を五千七十四と数えたてるその執念もさることながら、これを、

かくて十一月廿六日におりゐさせ給夜、空の気色さへあはれに、雨うちそそぎて物悲しく見えければ、

として著者の抒情でもっておいつつむ。文永三年、関東に事あり、将軍の座を追われた宗尊親王が上洛するが、これをも事件を悲劇の主宗尊親王に即して抒情的にとらえている。亀山院の崩御についても、その近習の人々の悲しみを哀色濃く描く。

それに、例えば後鳥羽院の隠岐遷幸を描いて、すでに指摘尽されているように、

はる〴〵と見やらるる海の眺望、二千里の外も残りなき心ちする、いまさらめきたり（新島守）

院の島での生活に、光源氏の須磨流謫を重ね合わせ、その多難な生活を、その御詠をはさみながら、

年もかへりぬ。……浦よりをちのはる〴〵と霞みわたれる空をながめ入て、過ぎにしかた、かきつくし思ほし出づるに、行方なき

御涙のみぞとどまらぬ。……たとしへなくながめしほれさせ給へる夕暮れに……七条院より参れる御文、ひきあけさせ給より、いといみじく、御胸もせきあぐる心ちすれば……（新島守）

と描く。例によって〈年もかへりぬ〉という単なる時の推移ではない、この場合、時の推移をその状況の変化にからめて実感する院の、多難であった一年への感慨がこめられているし、続く叙述にも著者の、作中人物の院によせる一体感があふれていて、こうした著者の共感が、後鳥羽院に、光源氏の古典の世界を重ね合わしめたものと言える。それに前にも述べたように、この後鳥羽院への共感をかきたてるものこそ、現実に著者の身近にあった後醍醐天皇であり、

出雲の国やすきの津と言所より、御舟にたてまつる。大舟二十四艘、小舟ども、はしに数知らずつけたり。遙かに押し出だす程、いま一かすみ心細うあはれにて、まことに「二千里の外」の心ちするも、今さらめきたり。かの島におはしまし着きぬ。昔の御跡は、それとばかりのしるしだになく、人のすみかも稀に、をのづから海士の塩やく里ばかり遙かにて、いとあはれなるを御覧ずるにも、御方の上はさしをかれて、まづかのいにしへの事思し出づ。かかる所に世をつくし給ひけん御心のうち、いかばかりなりけんと、あはれにかたじけなく思さるるにも、今はた、さらにかくさすらへぬるも、何により思ひ立ちし事ぞ、かの御心の末や果たし遂ぐると思ひしゆへ也（久米のさら山）

この後醍醐天皇に寄せる著者の共感が、その後醍醐天皇をして後鳥羽院のいにしえを回想させ、この後鳥羽院の体験に重なる後醍醐天皇の心情を、

まことに「二千里の外」の心ちするも、今さらめきたり

とし、光源氏に重ね合わしめるのであった。このような古典『源氏物語』と『増鏡』との関係は、単なる古典の借用にとどまらず、内在的なかかわりを示すものと言うべきであろう。この内在的な物語性は、構成面にも、例えば巻三の冒頭、後堀河の登場を描くのに、鏡物の手法としては、ただちにその帝紀を記すべきところであるが、これをその父君守貞親王からの皇位継承をめぐる事情から描きおこす。すなわち、守貞その人は断念していたのを、

この乱れ（承久の乱）出できて、一院（後鳥羽）の御族は、みなさま〴〵にさすらへ給ぬれば（藤衣）

にわかにこの守貞の皇子の後堀河天皇の即位を見ることになったとする。つまりこの後堀河天皇の描きようは、単なる帝紀としてのありようではなく、この前の承久の乱とのつながりにおいて描く物語の構想を以てしていることが指摘できよう。四条天皇の崩御から後嵯峨天皇の践祚への運びようも、『五代帝王物語』を踏まえながら、四条天皇の予期せぬ急死から、これははじめにふれたところであるが、皇位継承の次第を、『帝王物語』のように関東の側からではなく、関東の使者を待ち受ける順徳系の修明門院、土御門系の承明門院の側に視点をすえ、サスペンスに満ちた物語としての世界を形成している。後醍醐天皇の中宮禧子の懐妊とのことに人々の騒ぎ、祈祷のものものしさを

描きながら、それが意外にも空産に了る。その〈おぼしなげき〉の中に、〈其比、左の大臣実泰も失せ〉〈世中いみじく嘆きあへり〉、以下、ひき続き疫癘の猖獗、世良親王の死、そのめのと親房の出家、主上の不例へと、不祥事の相続く中に元弘の乱がついに明るみに出ることになる。例によって〈かくいふは、元弘元年八月廿四日也〉の一文が、やはりこのような状況の積み重ねの上に物語の核心へと迫る構成と見合った文体をなしている。要するに、後醍醐天皇へと収斂しようとする著者の意図が顕著であり、これが、持明院系の光厳天皇の大嘗会の儀式を描いても、

京には（隠岐の先帝に対比しての意を含む）十月になりて、御禊・大嘗会などのいそぎに、天の下物騒がしう、内蔵寮、内匠寮、うち殿、染殿、なにくれの道〳〵につけて、かしがましうひびきあひたるも、かたつ方（先帝の側を指す）は涙のもよほし也。悠紀・主基の御屏風の歌、人〴〵に召さる。書くべき者のなければ、かしこへまいれる行房中将をや召し返されましなど、定めかねたまふ。まだきに伝へ聞こしめしければ、よひの間の静かなるに、御前にことに人もなく、この朝臣ばかりさぶらいて、昔今の御物語のついでに、「宮こにいふなる事は、いかがあらんとすらん。さもあらば、いとこそうらやましからめ」と、うち仰られて、火をつく〴〵とながめさせ給へる御まみの、忍ぶとすれど、いたう時雨させ給へるを見たてまつるに、中将も心づよからず、いと悲し。（久米のさら山）

として、やはりこれを後醍醐天皇の側にひきつけてとらえ、単なる大嘗会の記録にとどまらない、先帝の内面からこれをとらえているわけである。

七

『増鏡』は、その書名、冒頭の序から見ても、明らかに鏡物としてのジャンル意識を強く継承しながら、その根底から物語の世界を志向していると言える。この物語の世界を内在することで、後鳥羽院に始まる親政再興への営為が後醍醐天皇によって完成される、とする構想を顕在化させ、〈古をかがみ、今をかがみる〉（今鏡・序）といった鏡物の姿勢を、『今鏡』などの聖代に対する祝言の色濃いものとは同次元には論じられないほど強力なものにしている。その意味で『増鏡』は、その鏡物としてのあり方を方法とすることで「世継」を一層積極的に再生せしめたと言える。また、そのような著者の姿勢があったればこそ、『五代帝王物語』をさしおいて重ねて『増鏡』を執筆したと言うべきであろう。

なお重ねて付言するならば、このような、ある構想を以て歴代を集約的に描く歴史文学の方法は、『今鏡』のような鏡物ならぬ、例えば六代にわたる歴代を一応は描きながら承久の乱へと集約する、それもいささか修辞が過剰で、むしろこの過剰な修辞にこそ著者の意図をすら感じさせる『六代勝事記』、「五代」と言いながら、後嵯峨系へと集約する『五代帝王物語』、『平家物語』や『曽我物語』などの先行作品

を、儒教思想と因果応報観をよりどころに保元から暦応までをたどる『保暦間記』など、これまでの文学史ではほとんど無視されて来た歴史物語の諸形態に、すでに見られた。またこれらの伝統の上にこそ、『今鏡』などの平板な世継を越えた『増鏡』のありえたことをも、文学史の問題として付言しておきたい。

注

（1）群書類従本による。

（2）いまだ明らかではないが、公家で、しかも関東圏にも近い人であったろう。

（3）底本の行数により概算した。

（4）例えば松村博司氏『歴史物語』（昭和36年刊）は、両者の類似する個所十カ所をあげ、その中、問題の後嵯峨天皇践祚の事情を含む二カ所を確実に関係のあるものとしておられる。

（5）木藤才蔵氏『増鏡』（日本古典文学大系　昭和40年刊）による。

（6）『水鏡』には、二系統の諸本があると言われるが、問題の個所については、両系統に大差はない。けれども、一応古態を伝えると言われる流布本系の本文（『新訂増補国史大系第二十一巻　水鏡』所収）による。

（7）昭和五十年五月　名古屋中世文学研究会での口頭発表「太平記天正本の本文について」。

（8）『平家物語』のこの種の結びの一文が果す効果については、すでに指摘されているが、これを改めて『増鏡』との近さにおいてとらえるならば、『平家物語』の評価に、一つの視点を設けることになろう。

（9）木藤才蔵氏『増鏡』（日本古典文学大系　昭和40年刊）解説。

（10）吉岡幹子氏「増鏡の最終部分に関する疑問」（名古屋大学　国語国文学25　昭和44・12）・西沢正二氏「『増鏡』未完成説の試み」（国語と国文学　昭和49・12）